

安楽寺だより

第48号

紙面内容

- 2面 秋季永代経法要を勤める
- 3面 得度式を終えて 若院
- 4面 日本仏教史(補足) 蓮如上人4

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

「縁起の法」を顕かにされた釈尊

第7回 お釈迦さまの悟りとは？

お釈迦さまが、お悟りになり仏陀となられたのは、三十五歳の時とされています。インドのガヤー郊外の菩提樹の下に座られたお釈迦さまは、自分自身のこれまでの生活を内観されました。二十九歳まで過ごされた王宮での快樂生活、そして出家した後の苦行生活という二つの生活を体験されました。

お釈迦さまは、人間として生まれた者が経験する古い・病い・そして死の苦しみを滅する道を深く洞察され、「聖なる智慧」を得るために瞑想・禅定されました。そして人間の真実の道理を見極め、老病死という現実が、苦しみの本当の原因ではないと気付かれました。

私たちのところが、真実ではない「我」に振り回され、とらわれてしまうところに苦の原因があると顕かにされたのです。



人間は生きていく限り、欲望のうずきは絶えず現われます。何らかの対象に対して執着するからこそ、欲望として出てきます。常に何かを求め続け、欲望によって満足されることのない不安を抱える「人間の無知と煩惱の本性」にあることに目覚められました。

こうした煩惱のこのころの働きを凝視し、「欲望の抑制」こそが不安を解決する道であるとお悟りになられたのです。

お釈迦さまは、この世に存在するすべてのものを貫き通す法(教え)すなわち真実の道理を顕かにされました。

それは、自己存在も万物をも包み込む大きな真実の中にはたらいっているものでした。

『これあるに縁ってかれあり これ生ずるに縁ってかれ生ず これなきに縁ってかれなし これ滅するに縁ってかれ滅する』(あらゆるものは縁によつて生まれ、縁によつて滅びる。)

(ウダーナより)

この縁起の道理に対する無知(無明)が、すべての苦しみ・悲しみの根本です。人間は、この『縁起の法』を諦らかに見詰め、それにしたがってこの世を生き、静かに古い、寂かに去るべきです。



ブッダガヤーの大塔

永代経 法要



九月十三日、秋の永代経法要をお勤めしました。日中は暑さの残る日和でしたが、大勢のご門徒の皆様にご参拝いただきました。感染対策をした本堂で読経する中、亡き方々を偲び、ご焼香をしていただきました。

その後、榎山正樹師（稲沢市・教西寺住職）の、ご法話をお聞きいたしました。

「永代経は、亡くなられた方の供養のため

「草刈って牛ほどの 岩あらわれる」

に勤められると思っておられる皆様が多いと思います。お経は、ほとけさまがお説きになったお言葉で、迷いの中・苦しみの中におられる方を導いてくださるお言葉が説かれています。真宗では、亡き人はほとけさまのお浄土世界に還られ、諸仏として阿弥陀様のお手伝いをする大切な方と考えます。ご法話を聴聞することは、ほとけさまの教えを聞いて、私が迷いの世界の只中に居ることを確かめ、一日一日の大切さに目覚めさせていただく場であります。

「私の寺では、ほとけさまのお言葉を、山門前にある掲示板に出しております。

先日「草刈って牛ほどの岩あらわれる」

という言葉を出しました。それを読んで下さった方から、意味を尋ねられる方、感想を話される方など様々に教えて下さいました。

「草刈って」とは、雑草を刈り、埃・汚れを取ってきれいにすることを例えて、ほとけさまの教えをお聞きして、清らかなところが現われると思つたらという意味です。

「牛ほどの岩あらわれる」とは、びくともし

ない我執のところが明らかになった、という意味です。仏法を聞いて「あなたは、こう申されるけれど、私に言わせれば・・・」とか、「ほとけさまの世界はそうかもしれないけれど、娑婆の世界はそうはいかない・・・」と返答があります。

私たちは、我執という岩を持っている、そういう根性を持っている。だから、ほとけさまの教えがスーとところに入つてこない、「自分さえよければ」という我執のころは、根深いものがあります。

しかし、教えを自己の身に聞くと、自分のころや思いを省みることができます。



「そうでした・・・」とか「ほとけさまのおっしゃるとおりです・・・」と頭が下がる時、教えに出遇えたという事です。

得度式を終えて

今年八月四日、長男の龍生(たつき)と妻の由香里(ゆかり)が、京都・東本願寺に於いて、得度式を受式させていただきました。釋龍生(しゃくりゆうしよう)釋尼由心(しゃくにゆうしん)という法名をいただき、新たに仏弟子として歩ませてもらったことになりました。

得度とは「度を得る」ことです。度とはサンスクリット語のパーラミター(波羅蜜)の訳になり、悟りの世界に渡ることを意味します。真宗大谷派では親鸞聖人が仏門に入られた九歳にならない、その歳以降に受式することができます。そして聖人がご生涯をかけて頭かにされた本願

念仏の教えを皆さまにお伝えし、共に念仏を申す身として御同朋御同行の精神を忘れずに生きていく誓いをたてさせていただくものであります。

今年も新型コロナウイルスの影響もあり、短縮を余儀なくされた得度式ではございましたが、全国より沢山の方が受けにこられ、自分も三十年ほど前に受けさせていただいたことを思いだしておりました。得度式の最中は、真つ暗な御影堂の中で受式者以外は家族でも決して入ることも見ることもできず、仏弟子となる人生の中で一度きりの経験を、お堂の外ではありましたが感じさせていただいて感慨深いものがありました。

ただ得度式を受けたと言っても、今までの人生が百八十度変わる訳ではありません。これまでの歩みを通して、そして親鸞聖人の教えをいただきながら、皆様と共に一人の「聞法者」として耳を傾けられるようお願いいたします。私自身も改めてそのことを知らされた今を、大切にしていきたいと思っております。

若院 吉田昌史

いちもんぼうしゃ

「一聞法者」として歩む



秋彼岸墓法要を勤める

九月十九日、八事霊園安楽寺墓地に於いて、秋彼岸法要をお勤めしました。台風の影響による風と雨を心配しておりましたが、何とか傘を差さずにお参りしていただくことができました。

十時半から永代供養墓の前で読経をいたす中、お集まりの皆様は、亡き方々を偲んでお焼香をしていただきました。ご参拝誠にありがとうございました。



仏教豆知識

第四十八回



日本仏教史

補足 蓮如上人4

⑦ 北陸での布教

近江の国（現在の滋賀県）で布教をされた蓮如上人は、その後越前・加賀の国（現在の石川県）に布教の地を求められました。この地の各村々での布教について次のように語っておられます。

「三人まづ法義になしたるものがある、と仰せられ候。その三人とは坊主と年老と長と、この三人さへ在所々々にして仏法に本付（もとづき）候はゞ、余のすえずえの人はみな法義なり、仏法繁昌であらうざるよ」（栄玄記）

坊主とは、真宗諸派の異端の坊主であり、年老（としより）長（乙名）は当時の惣村を動かしている村の顔役のことを言います。こうして、各地に流布していた、いわゆる「物取り信心」や「善知識だのみ」の信心を批判して、親鸞聖人の教えを解りやすく『御文』を通して語り、本願寺の教線

を弘められました。

⑧ 吉崎御坊の建立

文明三年（一四七一年）には、越前・加賀の国境の吉崎に道場（御坊）を建立されました。この地は、漁業の盛んなところで、生きるために殺生をなりわいとしていた民衆に対して、

『ただあきないをもし、奉公をもせよ、獵・すなどりをもせよ、かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるわれらごときいたづらものを、たすけんとかいいます。弥陀如来にましますぞとふかく信じて・・・念仏申すべきなり』（御文一帖三通）と語りかけられました。

上人の教えは、民衆に受け入れられて、吉崎御坊は、たちまちに門前町のごとく繁昌していきました。



石川県 吉崎御坊

先月執り行われた安部元首相の国葬

儀に対する賛否の声が、日本中に拡がりました。

▼そんな折、ご近所にお住いの

七十二歳の男性が、突然亡くなられました。

た。お一人暮らしで、親族が営む電気店

を手伝っておられました。▼最近、町

の電気屋さんが減る中、彼は様々な要望

にすぐに対処して下さる方で、近隣の住

人にとって大変貴重な方でした。いつも

笑顔で優しく接して下さるお姿を思い

起こし、縁のある人と丁寧に應對してい

ないことが多いわが身を恥じました。

▼彼のご逝去は、自分の生き方を見直す

縁としなければと思っております。合掌